

ろう教育史ビデオ『手話で学んだ先輩たち』の作成にあたって

東京都 野呂 一

1. 目的

わが国のろう教育は、大正 14 年前後を境として、手話法を中心とした教育から口話法に変わっていった。今から 75 年前のことである。

ということは、およそ 70 歳以上のろう者たちの中に手話法で学んだ方が大勢いることになる。そうした先輩たちの手話語りを記録し、分析することによって当時のろう教育を知ることができるのではないかと考えた。

そこで、デジタル・ビデオ(DV)のカメラを購入し、昨冬から、函館・大阪・東京などで年輩ろう者の手話語りを収録してきた。

ろう文化と日本手話の啓発活動につとめるグループ D PRO(代表、米内山明宏)が、2001 年 7 月 21 日東京で、ろう者の祭典「THE DEAF DAY 2001」を開催した。その時私は、ろう者の歴史に関する企画を任されたため、素人ながら『手話で学んだ先輩たち』の歴史ビデオを制作、放映した。

現在、デジタル・ビデオのお陰で劣化の少ない収録が可能になり、また、パソコンによるビデオ編集が容易になった。今後は、ビデオによるろう歴史の研究発表が増えていくものと思われる。

そこで、私が制作したビデオを基に、その内容や制作意図、制作上の問題点などを明らかにし、ろう者としてのビデオ発表を推進するとともに研究や制作技術の向上を図ることを目的とする。

2. 内容

ビデオの内容を簡単に紹介する。収録時間は 38 分である。ビデオに出演していただいたのは、以下の 11 人である。

中川タツさん(103 歳、東京都在住、ろう者)
牛山翠子さん(93 歳、仙台市在住、ろう者)
澤田勝之さん(99 歳、松阪市在住、ろう者)
樋口豊平さん(93 歳、函館市在住、ろう者)
進藤タミさん(77 歳、函館市在住、ろう者)
進藤キヌエさん(71 歳、函館市在住、聴者)
藤原弘實さん(61 歳、函館市在住、ろう者)
北野孝一さん(95 歳、藤井寺市在住、ろう者)
中川俊夫さん(95 歳、神戸市在住、聴者)
上原金太郎さん(83 歳、函館市在住、ろう者)
芝崎博武さん(65 歳、東京都在住、ろう者)

日本最高齢ろう者中川タツさんのオープニングに始まり、メインタイトルが流れた後、牛山翠

子さんの手話語りが始まる。熊本盲啞学校の存在を知り、ろう教師の存在に驚き、手話の素晴らしさに感激したという内容で視聴者を引きつける。

ナレーター(宮本一郎さん)の登場で場面が切り替わっていき、先輩たちの手話語りを通して、明治大正時代の東京聾啞学校や函館盲啞院、大阪市立聾啞学校の教育内容が紹介されていく。

東京では、視話法を目指しながら筆談による教育法に傾いていったことや、ろう教員を多数輩出した師範科の話題が中心になる。澤田勝之さんが口話教育開始のために神戸聾学校を退職してしまったこと、終戦後、聾学校に戻ったら手話学級がなくなり口話だけになってしまったという芝崎博武さんの体験談には、胸を打つものがある。

函館では、佐藤在寛院長が、手話ができなくても手話による教育方針を死守したことが、藤原弘實さんらの証言で理解できる。また、ろう者のいる家庭では、手話を覚えることが当たり前とするところもあり、その思い出を進藤タミさんの妹、キヌヨさんの話で窺い知ることができる。

大阪では、現在使われている指文字の発祥地であり、優れた教師群による輝かしい時代があったことに触れた。黄金時代の唯一の生き残りである中川俊夫先生の手話は、聴者でありながら魅力的であり、必見ものである。また、ろう教師の一人で、すぐれた手話観を持っていた藤本敏文(全日本聾啞連盟初代理事長)の論文の一部を紹介する。

昭和 8 年 1 月 27 日、全国盲啞学校校長会議で鳩山文部大臣の訓示によって口話法が正式な教育方針になっていく経過と、大阪の高橋潔校長が手話を擁護する立場で反論する場面では、昔の文章をそのまま引用したため、難しくなっている。

北野孝一さんが、口話法の宣伝的な存在にあった西川はま子は、肺炎で死んだのではなく本当は自殺だったことを証言している。これは、今までの認識を根本的に覆すものであり、歴史研究の難しさを感じてしまう。

最後に、芝崎さんが「昔は本当にすばらしい手話がいっぱいあったが、今のようにビデオに収録されることなく消えてしまった。残念だ…」としんみり語るところには共感を覚えるであろう。

結論はあえて出さず、テロップによって、ろう教育の歴史を見つめ直すことを視聴者に訴えて、このビデオは終わる。

3. 方法

(1) ビデオ制作の意図

年輩のろう者の手話の美しさ、たくましさを伝えるとともに、彼らの手話語りを見ることによって、ろう教育が手話から口話へ変わっていく、そのおおまかな流れを理解できる内容のビデオを作ることを念頭に置いた。

今回は、「全国編」として位置づけ、国立東京聾唖学校と私立函館盲唖院、大阪市立聾唖学校の3校を選び、ビデオシナリオの構築に入った。

手話語りの内容を理解できるよう、全シーンにわたって字幕を挿入し、また、貴重な記録や写真をふんだんに盛り込み、ろう教育の歴史を知らない人も歴史通の人も楽しめるようにした。

ビデオの歴史的著述内容に責任をもつために、私が今までに研究発表してきた「明治大正時代のろう学校教員養成機関」（日本特殊教育学会 2001）や、「指文字の地域的特性と歴史的変遷」（日本手話学会 2001）、「藤本敏文の手話の考え方（上野益雄先生との共同研究）」（つくば国際大学紀要 2001）などの論文を活用した。

(2) ビデオ収録の方法

私の出身校である北海道函館聾学校、筑波大学附属聾学校の同窓会や地元ろうあ協会などの協力を得て、手話で学んだ頃の先輩を探し出す作業から開始した。

ビデオ収録に協力していただけることになった時は、なるべく一人か二人で何うようにした。相手が気にならない位置にカメラを三脚にセットし、収録を開始したら自分は聞き手に徹して、なるべくカメラに触れないようにした。

テーマを「ろう教育を受けた頃の思い出」に絞って、こちらからいろいろ聞きながら、思うことを自由に語ってもらった。質問する内容は、あらかじめろう学校の年表や記念誌、同窓会名簿などを熟読して決めておいた。

(3) ビデオ編集の方法

パソコンによるビデオ編集では、『聾唖者の沖繩戦』などのビデオ編集で実績のある千々岩恵子さんの協力に負うところが大きかった。

まずこちらでシナリオを作成しておき、どこからどこまでのシーンを使うか、タイムコードを記録しておいた。千々岩さんと同じ編集ソフト（canopus 製）を持っていたため、ビデオ・キャプチャ（シーンの取り出し）作業や編集作業はかなりスムーズにできたと思われる。

とくに困難を極めたのは、年輩の手話を日本語に置き換える作業や字幕の挿入作業であった。

4. 考察

歴史研究ビデオを制作するにあたり、克服すべ

き問題点を以下に指摘する

- ▼ 何のためにビデオを作るか、編集方針を確立することの難しさ。
- ▼ こちらの趣旨を理解し、ビデオ収録に協力していただく人を探すことの困難さ。
- ▼ 念入りな下調べや、密な交渉など、地道に研究調査活動を続けていくことの大変さ。
- ▼ 質問内容の設定など、聞き手の能力。
- ▼ 撮影テクニックやパソコンでの高度な編集能力が求められること。
- ▼ シーンの選出や手話の日本語化、字幕挿入作業など、まさに根気との戦いになること。
- ▼ ビデオ制作のために、かなりの時間や経費がかかってしまうこと。

以上のように、問題点はいくらでも挙げることができ、それに勝る利点もある。

- ◆ 先輩たちの美しい手話を後世に残すことができる。
- ◆ 手話語りの内容を知ることにより、視聴者が自分の生き方を見つめ直すことができる。
- ◆ ろう学校で学んだろう者にしかできない研究発表ができる。
- ◆ 教育学や社会学、手話学などの研究に対して、重要な指針や素材を提供できる。
- ◆ ろう教育史と手話語りが結びつくことによって、ろう歴史学がより身近なものになる。
- ◆ 先輩と後輩とのつながりや、地域のろう者の信頼関係がより強固なものになる。

5. 結論

今回のビデオ制作を通して、強く思ったことは、昔の手話が消えてしまうことへの危惧である。

手話の共通化が進められており、それ自体は悪いことではないが、やはりろう学校で育まれ、地域に根づいた手話はもっと大切にされてしかるべきではないかと考える。

また、情報伝達の正確性を保つために、年輩ろう者の取材は、ろう学校に学んだろう者が自らすすんで行うべきである。

函館で試写してもらったところ、出演者の家族が大喜びしたこと、あの人が画面で生き生きしていると驚かれたことなど、さまざまな反響があったと聞いている。

せっかく収録したのに今回登場できなかった方や、泣く泣くカットしたシーンがあった。次回は、地方編の制作に挑戦してみたいと思う。

今回制作したビデオは、まだまだ素人の域を脱していない。このビデオをきっかけに、ろう者の手によって歴史研究のビデオ発表が広く普及し、その研究方法や制作の仕方に、より磨きがかかることを期待してやまない。